

J.LEAGUE NEWS

Vol. 136

27.Apr.2007



編集・発行
社団法人 日本プロサッカーリーグ
ホームページ <http://www.j-league.or.jp>

スポーツで、もっと、幸せな国へ Jリーグ百年構想

Will Be
J.LEAGUE



© J.LEAGUE PHOTOS

4月14日のセレッソ大阪U-15対ガンバ大阪ジュニアユースで幕を開けた2007 Jリーグ U-13

「2007 Jリーグ U-13」が開幕

「個の育成」促進を目指して

「2007 Jリーグ U-13」が、いよいよスタートした。これまで公式試合への出場機会の少なかったU-13 (13歳以下) 年代の選手を対象とし、さらなる「個の育成」の促進を目指して開催されるもので、Jリーグ加盟の31クラブの下部組織を中心に48チーム (変則参加の1チームを含む) が参加する。地域色を意識した名前を冠した5つのブロックに分かれ、ホーム&アウェイ方式のリーグ戦を基本として、2008年3月31日までに合計318試合を行う。開幕戦となった4月14日のセレッソ大阪U-15対ガンバ大阪ジュニアユース (南津守さくら公園スポーツ広場) の試合には、Jリーグの鬼武健二チェアマンも足を運び、選手たちを激励した。

オフィシャルスポンサー

Calbee

Canon

SUNTORY

JOMO

NicoS

KONAMI

AiDEM

HEIWA

GE Money

ネットワークパートナー

NTT
東日本 | NTT
西日本

Jリーグ百年構想パートナー

朝日新聞

リーグカップスポンサー

ヤマザキナビスコ

エクイップメントサプライヤー

molten

育成 年代別対策のスタートとなる 「2007 Jリーグ U-13」

出場機会の少ない年代に定期的な試合の場を



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

セレッソ大阪U-15対ガンバ大阪ジュニアユースのキックオフ前、選手たちを激励するJリーグの鬼武チェアマン。試合後、「今日は生き生きとプレーしていて、希望に満ちあふれた印象だった」と感想を述べた

選手の着用するユニフォームの袖には大会エンブレムがあらわされている

「2007 Jリーグ U-13」は、公式試合への出場機会が比較的に少なかった13歳の選手たちに、そのチャンスを拡大しようという目的から、日本サッカー協会との協力によって生まれた大会である。

主に中学1年に当たる13歳を対象とした全国規模の公式大会は、これまで存在しなかった。もちろん、14歳以下、15歳以下を対象とした大会への参加資格は有するが、フィジカル面などで年長の選手に劣り、なかなか出場できないのが実情だった。その年代の育成・強化を見直す上で、このリーグの発足は大きな意味を持つ。

いわゆる6-3-3制の学校制度の影響により、スポーツの世界では、小学生年代で芽生えた才能が、中学に進んだ直後は「球拾い」「補欠」といった形で日の目を見ないことも少なくない。JリーグU-13は、そのタレントを「埋もれさせておくのではなく、16～17歳といった年代に向けて伸ばす」(Jリーグ・山下則之技術委員長)のための、定期的な試合環境の実現である。

リーグ戦による試合数の増加というメリットは言うまでもないが、この大会の大きな特

長は、原則的にトップチームと同じくホーム＆アウェイ制を経験できる点だろう。対戦相手のホームを訪れることは、慣れ親しんだグラウンドとは異なる条件でのプレー、移動の影響などを体験することが可能となり、心身両面のたくましさを養成するのに役立つ。遠征先での名所見学や、地域の人々との触れ合いは、社会性をはぐくむ機会となる。また、対戦相手を迎えるホームチームとして、対戦相手の会場を訪れるアウェイチームとして、それぞれに必要な礼儀を身につける上でも、この方式が果たす役割は大きい。ピッチの内外におけるさまざまな経験は、プレー面でも、人間としての成長という意味でも大きな刺激となり、飛躍のきっかけとなるのが期待される。

もちろん、学校や家庭など生活面が基本となる年代だけに、試合のための移動が負担になってはならない。そのため、リーグ戦は5つのブロックに分かれて行われる。各ブロック内で優勝チームを決め、MVP賞や得点王といった個人表彰も設けられる。

各ブロックは地域のイメージに結びつく「ボラリス」(北極星の意)、「メトロポリタン」

(大都市、都会の意)、「ボルケーノ」(活火山の意)、「富士山をイメージ)、「ヤマトタケル」(日本神話に登場する大和の英雄から)、「サザンクロス」(南十字星の意)の名称で呼ばれる。また、メトロポリタンにはクマガヤサッカースポーツクラブ、三菱養和サッカークラブ、三菱養和サッカークラブ調布ジュニアユース、三菱養和サッカークラブ調布ジュニアユース、横河武蔵野フットボールクラブジュニアユースというタウンクラブの4チームが参加。将来のリーグ戦の拡大を視野に入れたモデルケースとして注目される。ボラリスのコンサドーレ旭川ユースU-15は、北海道内で行われる試合のみ出場という意味で変則参加となる。

なお、遠征に必要な交通費の半分は、Jリーグによって負担される。

このJリーグ U-13は、年代別の育成対策のスタートとして開催され、Jリーグが取り組む最も重要な活動の一つ。同様に年内にはU-14のリーグを試行的に実施し、2008年から正式にスタートする予定。また、高校1年にあたるU-16のリーグも同年に試行的に開催し、09年から正式に発足させる予定となっている。

開催概要

■大会名称 2007 Jリーグ U-13

■主催 財団法人 日本サッカー協会
社団法人 日本プロサッカーリーグ

■開催期間 2007年4月14日～2008年3月31日

■参加チーム 合計47チーム(うちタウンクラブ4チーム)
+変則参加1チーム



◆ボラリス(北海道・東北・北信越・北関東) 8チーム/48試合

コンサドーレ札幌ユースU-15/ペガタ仙合ジュニアユース/
モンテディオ山形ジュニアユース庄内/モンテディオ山形ジュニアユース村山/
アルビレックス新潟ジュニアユース/水戸ホーリーホックジュニアユース/
ザスバ草津赤堀U-14/コンサドーレ旭川ユースU-15(変則参加)

◆メトロポリタンA・B(関東) 2ブロック 各10チーム/90試合

鹿島アントラーズジュニアユース/鹿島アントラーズノルテ/
浦和レッズジュニアユース/大宮アルディージャジュニアユース/
ジェフU-15習志野/ジェフU-15辰巳台/柏レイソルU-15/
F C東京U-15深川/F C東京U-15むさし/
東京ヴェルディ1969ジュニアユース/川崎フロンターレU-15/
横浜F・マリノスジュニアユース/横浜F・マリノスジュニアユース追浜/
湘南ベルマーレジュニアユース/湘南ベルマーレオエステ/
横浜F Cジュニアユース/クマガヤサッカースポーツクラブ/
三菱養和サッカークラブ巣鴨ジュニアユース/
三菱養和サッカークラブ調布ジュニアユース/
横河武蔵野フットボールクラブジュニアユース

◆ボルケーノ(東海+甲府) 4チーム/12試合

ヴァンフォーレ甲府ジュニアユース/清水エスパルスジュニアユース/
ジュビロ磐田ジュニアユース/名古屋グランパスエイトU-15

◆ヤマトタケル(関西+徳島) 9チーム/36試合

京都サンガF.C.U-15/ガンバ大阪ジュニアユース/
ガンバ門真ジュニアユース/ガンバ堺ジュニアユース/
セレッソ大阪U-15/セレッソ大阪西U-15/
ヴィッセル神戸ジュニアユース/ヴィッセル神戸伊丹ジュニアユース/
徳島ヴォルティスジュニアユース

◆サザンクロス(中国・四国・九州) 7チーム/42試合

サンフレッチェ広島ジュニアユース/愛媛F Cジュニアユース/
アビスパ福岡U-15/サガン鳥栖U-15/サガン鳥栖唐津U-15/
大分トリニータU-15/大分トリニータU-15宇佐

■総試合数 合計318試合

※開催概要、試合日程等の詳細はJリーグ公式サイト内の「JリーグU-13」のコーナー(<http://www.j-league.or.jp/u13/>)を参照。

社会貢献

「アイデムしごと探検隊」がJリーグ事務局を訪問

小学生18名が仕事の現場に触れる

Jリーグのオフィシャルスポンサーである株式会社アイデムが、次代を担う子供たちに「仕事」に触れる機会を提供したいとの考えから企画した「アイデムしごと探検隊」が3月28日、Jリーグ事務局を訪問した。参加したのは、3月まで小学4、5年だった男女18名。鬼武健二チェアマンや事務局スタッフ、さらにJリーグ百年構想メッセンジャーの城彰二氏から話を聞いた後、事務局やJリーグの関連会社を訪れて関係者に質問したり、持参したデジタルカメラで撮影するなど、仕事の現場に触れた。最後に日本サッカーミュージアムを見学し、城氏のサイン色紙などをプレゼントされてスケジュールを終了。訪問の成果は、参加者が感想などを話し合い、雑誌記事風にまとめられてアイデムのフリーペーパーに掲載された。



Jリーグ事務局を訪れ、スタッフの話を熱心に聞く子供たち

イベント「キャノンJリーグミュージアム2007~Will Be その一瞬を伝えたい~」に協力

サッカーの魅力、醍醐味を伝えるJリーグの名場面を展示

今年で4回目の開催となる「キャノンJリーグミュージアム」は「フィジカル」「メンタル」「コンディション」をテーマに、サッカーの一瞬の躍動感や臨場感あふれるプレー、また筋骨きのないドラマの中で生まれる「喜び」や「悲しみ」、さまざまなコンディションの中で繰り広げられるシチュエーションを表現した写真の展示を中心に、4月3~17日に開催された。このほか、会場で撮影した写真をすぐにプリントし、任意のチームや選手にメッセージを添えて掲出すると、ミュージアム終了後に各クラブにメッセージが届く「写真応援メッセージをおくろう!」、抽選による来場者へのプレゼントなどの企画も実施。15日にはJリーグOB選手の小倉隆史氏、プロスポーツカメラマンの六川則夫氏を迎え、スペシャルトークショーも開催された。



Jリーグの鬼武チェアマンも足を運び、展示された写真を丹念に見て回った

イベント「ナビスコキッズイレブン クラブといっしょにファイナルを目指そう!!」

参加会場のホームチームの決勝進出によりビッグチャンスも



Jリーグ百年構想メッセンジャーの城彰二さん（左端）も参加

恒例の「ナビスコキッズイレブン クラブといっしょにファイナルを目指そう!!」が、2007Jリーグヤマザキナビスコカップの開幕とともに始まった。このイベントは、同カップの予選リーグから準決勝までの全試合を対象に、各会場に来場した子供たちにドリブルゲーム、シュートゲームなどにチャレンジしてもらい、応援するクラブと一緒に決勝の舞台を目指すという企画だ。参加者にはもちろん、大会特別協賛社のヤマザキナビスコ(株)が「おいしいプレゼント」を用意。また、決勝進出を決めたクラブの各会場でゲームに参加した子供たちの中から抽選で11名(合計22名)には、11月3日の決勝(国立競技場)の観戦チケットをプレゼント。さらに「ナビスコファイナルキッズイレブン」として、試合前のスペシャルイベント『ナビスコキッズバトル』に参加できるビッグチャンスも与えられる。

経営

Jリーグ・ゼネラルマネジャー(GM) 講座を開催

「Biz LAUNCH」でクラブの仮想経営を体験

Jリーグは3月27~28日、JFAハウスにおいて毎年恒例の「JリーグGM講座」を開催。Jクラブの社長やGM、将来のクラブ経営を担う管理職など28名が参加した。今回の講習では、マネジメントの知識・スキル・マインドの向上を目的に開発された「Biz LAUNCH」を利用したプログラムを実施。コンピューター上での仮想経営を通し、クラブ経営に必要な「マーケティング」「経営戦略」「組織管理」「人材育成」などのエッセンスと、それらの相互関係を体験する講習は、数字を根拠とした論理的な意思決定能力の取得を目標としており、受講者の高い評価を得ている。プログラムでは、会社設立、ビジョン策定、戦略、年度報告書、マーケットリサーチ、コストと利益、SWOT分析などをグループワークでシミュレーションし、戦略発表や結果報告を行いながら進められた。

地域密着

ホームタウン会議を開催

今回のテーマは「介護予防」

Jリーグは3月29日、JFAハウスにおいて、30のクラブから37人の関係者が出席し「ホームタウン会議」を開催した。今回の会議では、Jリーグのクラブがこの春から本格的に取り組むことになった「介護予防」がテーマ。どのようなサービスを提供することによって地域のお年寄りに喜んで参加していただけるかといった点について、活発な意見や事例の発表、交換が行われた。この会議は、Jリーグがスタートした1993年にJリーグホームタウン委員会として発足以来、精力的に活動을続け、99年にホームタウン会議と改称。「総合型スポーツクラブ」「自治体」「商店街、自治会/町会」「選手の学校訪問/施設訪問」「エコロジー」「ボランティア」「後援会/ファンクラブ」など、幅広いテーマで考え方や事例を交換し合っている。

大会 Jリーグ優勝チームがFIFAクラブワールドカップに挑戦 FIFA理事会で開催国枠の設置が決定

クラブチームの世界一を決める大会として2005年から日本で開催されている「FIFAクラブワールドカップ」に、初めて開催国枠が設置される。3月22～23日、スイスのチューリヒで行われたFIFA(国際サッカー連盟)理事会で決定した。今年の大会も12月に日本で開かれる予定だが、開催国枠として今季のJ1リーグ戦優勝チームが出場する。

この決定についてJリーグの鬼武健二チェアマンは「大変喜ばしく思う。この決定は、J1各クラブにも一層の励みとなるし、J1リーグ戦の一層の盛り上がりにつながるものと期待する」とコメントした。なお、浦和レッズ、川崎フロンターレが出場しているAFCチャンピオンズリーグ2007の優勝チームにも、従来どおりAFC(アジアサッカー連盟)の代表として出場権が与えられる。



© J.LEAGUE PHOTOS
昨年のFIFAクラブワールドカップ決勝

大会 A3チャンピオンズカップ、今年は6月に中国で開催 日本からは2006 Jリーグチャンピオンの浦和レッズが出場

昨季の中国、韓国、日本のリーグ優勝チームなどによって争われる「A3チャンピオンズカップ2007」が、6月7～13日に中国の山東スポーツセンタースタジアムを舞台に開かれることが、中国サッカー協会から発表された。

アジアサッカー界のレベルアップ、サッカー市場の開拓、相互の交流と発展の促進を目的として2003年にスタートした大会も、今年で5回

目を迎える。日本、中国、韓国の持ち回り開催は、日本で行われた昨年の大会から2巡目に入っている。今回は2006中国スーパーリーグチャンピオンの山東魯能、2006 Kリーグチャンピオンの城南一和(韓国)、2006 Jリーグチャンピオンの浦和レッズ、2006中国スーパーリーグ2位の上海申花の4チームが参加。1回戦総当たりリーグによってタイトルを争う。



© J.LEAGUE PHOTOS
A3 CHAMPIONS CUP 2006
昨年は日本で開催され、蔚山現代(韓国)が優勝

記録 岡田正義氏がJ1通算主審250試合達成 Jリーグ担当審判員としては初の記録

Jリーグ担当審判員の岡田正義氏が4月8日のJ1リーグ戦第5節、清水エスパルス対大分トリニータ戦(日本平スタジアム)において、J1の主審担当試合数が250に到達した。この記録はJリーグ史上初めての栄誉。岡田氏は1958年5月24日生まれの48歳。Jリーグ発足以前、日本サッカーリーグ時代の86年11月に1級審判員に初めて登録した。Jリーグの試合は93年5月19日のサントリーシリーズ第2節、横浜マリノス(現 横浜 F・マリノス)対ガンバ大阪戦(横浜市民三ツ沢公園球技場)で初めて主審を務めた。その後、99年にはJ1リーグ戦で100試合、2004年には200試合の記録を達成。1993年には国際審判員に登録、98年のFIFAワールドカップ フランスの主審にも選ばれた。2002年には日本サッカー協会よりスペシャルレフェリーの第1号として認定されている。



© J.LEAGUE PHOTOS
清水対大分戦でJ1主審担当試合数が250に達した岡田氏(左)

鬼武チェアマン 4月 関西で「イレブンミリオン」への理解、協力を要請



© J.LEAGUE PHOTOS
2007 JリーグU-13の開幕戦を観戦する鬼武チェアマン

4月10日、大阪でJ1・J2合同実行委員会を開催した。

会議では、新たに立ち上げた「イレブンミリオンプロジェクト」について再確認し、各クラブ実行委員からは課題の提起など、積極的な意見交換が行われた。

また、前日の9日には、関西のメディアを対象にした記者懇談会を開催し、あらためてイレブンミリオンについて説明した。鬼武チェアマンは「(イレブンミリオンの目標)達成に向けては、関西の盛り上げが必須」と、理解と協力を

求めた。

14日には、大阪で開催した2007 Jリーグ U-13のセレッソ大阪U-15対ガンバ大阪ジュニアユースを観戦した。

育成年代のきめ細やかな試合環境を構築するためにスタートしたU-13のリーグ戦だが、選手たちの生き生きとした表情と伸びやかなプレーに目を細め、「親という字は木の上に立って見る、と書く。親も指導者も周囲の大人も、子供たちが十分に個性を伸ばせるよう温かく見守ってほしい」と話した。

2007年スポーツ振興活動 第1期申請分の支援を決定

Jリーグは、毎年Jリーグ各クラブが実施するサッカー以外のスポーツ振興活動に支援を行っているが、2007年第1期申請分（2007年3月15日申請締切）につき40件の支援を決定した。

2007年度 スポーツ振興活動支援 第1期承認一覧（2007年3月30日現在） ★＝2007年新規支援対象

No.	クラブ名	行事名	対象種目	形式	参加対象者	開催期間	場所	日常型	その他	昨年度実績
1	札幌	第4期コンサドーレ札幌スポーツスクール in Fu's	ウォーキング、登山、MTB、フットサル、トランポリン、カーリング、スキー、スノーボード、リュージュ、スノーシュー、スケートなど	教室	原則、小学校3年～6年	7月～2008年2月	札幌市陸野野外スポーツ交流施設および周辺地域	●		○
2		コンサドーレ札幌スキーアカデミー in KIRORO 2007	スキー	教室、大会	小学生	4月14日、15日	キロロ スノーワールド		●	○
3		ベガルタ仙台 ソフトテニス指導者教室	ソフトテニス	教室	宮城県中学・高校ソフトテニス指導者	夏休み期間または春休み期間1回	仙台市内庭球場		●	○
4	仙台	ベガルタ仙台 バリアフリーサッカー教室	障害者サッカー（電動車椅子サッカー、視覚障害者サッカーほか）	教室	宮城県内の障害者	6月～2008年1月	仙台市内	●		○
5		ベガルタ仙台 女子サッカー教室	女子サッカー	教室	女子中学生	夏休み期間中1回（できれば2回）	シェルコム仙台		●	○
6	山形	女子駅伝チーム	駅伝	チーム	監督1名、選手3名	通年	あかねヶ丘陸上競技場ほか	●		○
7	鹿島	★鹿島アントラーズ剣道教室	剣道	教室	小学校1年～中学校3年	4月～2008年3月（通年）	鹿島神宮道場およびカシマスポーツセンター剣道場	●		○
8	水戸	水戸ホーリーホック バレーボール教室	バレーボール	教室	一般	5月～2008年3月	茨城県職業人材育成センター体育館	●		○
9		★水戸ホーリーホック 女子中学生サッカースクール	女子サッカー	教室	女子中学生	5月～2008年3月	水戸市ツインフィールドほか	●		○
10		レッズ・フレンドリー・フットサル [MIX]、[OVER40]	フットサル	大会	[MIX] 18歳以上で女性2名以上含む、[OVER40] 30歳以上で40歳以上2名含む	4月～12月	大原サッカー場内フットサルコート	●		○
11	浦和	レッズランドテニスクール	テニス	教室	一般、キッズ（小学校3年～6年）	通年	レッズランド内テニスコート	●		○
12	F 東京	F C 東京 バレーボールチーム	バレーボール	チーム	一般	通年	東京都内	●		○
13	東京V	★第3回東京ヴェルディ 1969 稲城グリーン駅伝	駅伝	大会	一般、小学生、中学生、親子	4月30日	稲城中央公園総合グラウンドおよびその周辺		●	
14		東京ヴェルディ トライアスロンチーム	トライアスロン	チーム	一般	通年	アクラブ稲城ほか	●		○
15		湘南ベルマーレ ビーチバレーチーム	ビーチバレー	大会、教室、チーム	自由	通年	平塚ビーチパークほか	●		○
16		湘南ベルマーレ トライアスロンチーム2007	トライアスロン	教室、チーム	自由	4月1日～12月31日	湘南平塚ビーチパーク、馬入ふれあい公園ほか	●		○
17	湘南	湘南ベルマーレ 女子ソフトボールチーム2007	ソフトボール	チーム、教室	女子	通年	厚木市を中心としたホームタウン各市町およびリーグ戦開催地	●		○
18		ベルマーレビーチサッカー大会2007	ビーチサッカー	大会、教室	子供～一般	4月～2008年2月	湘南ひらつかビーチパーク	●		○
19		湘南ベルマーレスポーツクラブ オーシャンスイムスクール	オーシャンスイム	教室	プールで100m以上泳げる中学生以上の健康な男女	5月12日～10月13日（毎週土曜日）	湘南ひらつかビーチパーク	●		○
20		ベルマーレカップ2007 第18回小学生駅伝競走大会	駅伝	大会	小学生	12月9日	平塚市総合公園		●	○
21	甲府	初心者フットサル教室（ハッピーフットサル）	フットサル	教室	原則として幼児、女性、シニア	5月～2008年3月	県下全域	●		○
22		アルビレックス新潟ゲートボール講習会	ゲートボール	教室	小学生以上	5月～12月	新潟市西総合スポーツセンター、各学校、新潟市西総合スポーツセンター	●		○
23	新潟	アルビレックス杯争奪ゲートボール大会	ゲートボール	大会	新潟市および近郊のゲートボールチーム	6月6日	東北電力スワンフィールド		●	○
24		アルビレックス新潟ランニングクラブ合同ランニングクリニック	ランニング	教室	中学生以上の一般ランナー	4月～12月（月2回）	東北電力ビッグスワンスタジアムおよびスポーツ公園内	●		○
25		アルビレックス新潟 フープクリニック	バスケットボール	教室	経験者、未経験者、指導者	6月～12月（14回予定）	新潟県内体育館	●		○
26	磐田	第10回ジュビロ磐田メモリアルマラソン	マラソン	大会	一般	11月11日	磐田スポーツ交流の里 ゆめりあ		●	○
27		★第1回ジュビロ磐田ミニバススクール	ミニバスケット	教室	小学校3年～5年	5月8日～2008年3月21日	浜松アリーナ	●		
28		第4回学生同好会選手権大会バスケットボール 東京杯バスケットボール2008	バスケットボール	大会	大学、短大のバスケットボールサークル、同好会	2008年3月初旬	京都府立体育館（予定）		●	○
29	京都	京都サンガF.C. GIRLSサッカーフェスティバル2007	女子サッカー	教室	小学生女子	7月25日	京都市西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場	●		○
30		ENJOYレディessサッカースクール	女子サッカー	教室	小学生以上の女子	5月7日～7月23日、10月15日～12月17日	京都府立体育館	●		○
31		★京都サンガF.C. ビーチサッカーフェスタ2007 In 網野	ビーチサッカー	大会	小学校4年以上の男女	7月1日	網野町タケノ浦海岸		●	
32		★京都サンガF.C. タグラグビー教室2007	タグラグビー	教室	小学生	9月30日	サンガタウン城陽グラウンド		●	
33	広島	トップス広島 スポーツクラブ	バドミントン、サッカー、バレーボール、バスケットボール、テニス	教室	幼児～一般（競技によって制限あり）	通年	ひろぎんの森、（株）大野石油店屋内体育館、広島広域公園陸上競技場ほか	●		○
34	愛媛	愛媛 F C フィットネス&レディessサッカー教室	フィットネス、女子サッカー	教室	女性	8月1日～2008年3月31日	松山三越屋上サッカー場	●		
35	福岡	アビスパ福岡視覚障害者サッカー支援活動	障害者サッカー	教室	視覚障害者	通年	福岡県立福岡高等盲学校	●		○
36		★第1回アビスパ杯ドッジボール大会（アビドッジ）	ドッジボール	大会	小学校4年～6年	10月28日	福岡市東区東体育館		●	
37		大分トリニータビーチサッカーフェスティバル2007	ビーチサッカー	大会	小学生以上	7月15日、16日	姫島海水浴場		●	○
38	大分	大分トリニータ ベースボールクラブ	野球	チーム	中学生	通年	大分市内・由布市内野球場、県内小学校グラウンド	●		○
39		大分トリニータ タグラグビー教室 2007	タグラグビー	教室	小学生	8月26日	大分スポーツ公園人工芝グラウンド		●	○
40		★大分トリニータ 知的障害者サッカークリニック	障害者サッカー	教室	知的障害者・児とその家族や友人	6月9日、8月25日、11月18日	大分スポーツ公園人工芝グラウンド		●	

日常型 25
その他 15
支援合計 25 15 31

参与選任

Jリーグは4月17日に開催した理事会で、以下参与の選任を承認した。

参与

小野寺 重之：前柏レイソル 実行委員
実行委員：2003年4月～2007年3月（在任4年）

平成19年度「ダメ。ゼッタイ。」普及運動を後援

Jリーグは、厚生労働省、財団法人麻薬・覚醒剤乱用防止センターなどが主催する平成19年度「ダメ。ゼッタイ。」普及運動を後援する。また、同運動に併せて実施される「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金運動に協賛。「国連薬物乱用根絶宣言」（1998～2008年）の支援事業の一環として、国民一人一人の薬物乱用問題に対する認識を高め、併せて国連決議による「6・26国際麻薬乱用撲滅デー」の周知と、内外における薬物乱用防止に協力する。実施期間は6月20日～7月19日。

第57回「社会を明るくする運動」に協力

Jリーグは例年に引き続き、法務省が主催する第57回「社会を明るくする運動」に協力する。すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動。強化月間となる7月1～31日に、試合会場での告知活動などに協力する。

スポーツ振興パートナーシップ契約について

Jリーグは、4月17日に開催した理事会で、株式会社ジェイリーグエンタープライズ（J L E）とスポーツ振興パートナーシップ契約を締結することを決定した。J L Eは「スポーツ振興くじ（toto）」を販売する独立行政法人日本スポーツ振興センター（NAASH）の広告宣伝および販売促進活動を受託しており、JリーグはJ L Eに対し、前記活動におけるJリーグのプロパティなどの使用権や広報活動への協力を行うもの。契約期間は、2007年4月1日～2008年3月31日。



©J.LEAGUE PHOTOS

1993年5月15日、ついにJリーグがスタートした。V川崎対横浜Mの開幕戦に先立って行われた華やかなセレモニー

Jリーグの15年を振り返る 第2回

「大会方式」

15年目を迎えたJリーグの歩みを振り返る2回目は「大会方式」を取り上げる。プロスポーツとしてのサッカーを、いかに日本に定着させるか。1993年の開幕以前から関係者は心を砕き、さまざまな側面から検討を重ね、試行錯誤を繰り返してきた。その当事者として発足以来かかわってきたJリーグの佐々木一樹常務理事の回想を交えながら、現在までの変遷をたどってみた。

2ステージ、4回戦制

1993年5月15日、Jリーグはヴェルディ川崎（現 東京ヴェルディ1969）対横浜マリノス（現 横浜F・マリノス）のカードで、待望のキックオフ。翌16日には残る4試合も行われ、10チームによる覇権争いがスタートした。

大会方式は2ステージ制で、それぞれの優勝チーム同士のチャンピオンシップによって、年間チャンピオンを決める。各ステージはホーム&アウェイによる2回戦総当たりのリーグ戦。つまり、1シーズンでは4回戦総当たりとなる。この方式も競技、ビジネスなど、さまざまな側面から検討を重ねて決定に至ったものだ。

まず、日本サッカーのレベルアップを目指した競技面。かつて日本のチームは、国際大会の後半戦になると息切れし、苦戦する傾向にあった。そこで日本サッカーリーグ時代のような2回戦制ではなく、4回戦制が採用される。国内でタフな日程をこなし、体力、精神力の向上を図らなければ、国際舞台での活躍は望めないという考えからだった。

また、プロスポーツである以上、安定した収入確保は不可欠である。Jリーグの発足以前から運営などにかかわってきた佐々木一樹常務理事は「最低でも20のホームゲームは必要だろうと考えた」と振り返る。その根拠は「これは当時の夢だが、1試合平均入場者が2万人になると、20試合で40万人。平均3,000円の入場料を支払っていただくとすれば12億円。入場料収入がこれだけあれば、クラブを運営できるだろう」（佐々木常務）というものだった。

リーグ戦で18試合、これにカップ戦で少なくとも2〜3試合が加われば、20を超えるホームゲームを確保できることになるわけだ。

「走りながら考えよう」

シーズンを前半戦と後半戦に分けてそれぞれのチャンピオンを決め、最後に両チームによるチャンピオンシップで年間チャンピオンを決定するという方式が、日本のファンに興味をもってもらえるのではないかと。それも2ステージ制、4回戦総当たりリーグ戦に至る

考え方だった。プロ野球でセ・パ両リーグの優勝チームが日本シリーズで日本一を争う方式が定着していたことも、受け入れやすさの背景にあったとも考えられる。

Jリーグが発足した93年当時、10年後にはチーム数が16に増え、そうなればJ2リーグをつくることのできるのではないかと、という予想があった。16チームになれば、4回戦制は限界となり、J1リーグは1ステージの2回戦総当たりリーグで各チームの消化試合は30と想定されていた。

発足から3年後の96年、チーム数は早くも16に達した。そこで「16チームになったら2回戦総当たりでやろうと言っていたので、予定通り実施しようということになった」（佐々木常務）。だが、この方式は翌年に継続しなかった。総試合数が95年の364試合から240試合と約34%減ったこともあるが、総入場者数が615万9691人から320万4807人と約48%減となるなど芳しい結果が得られず、97年からは2ステージ制およびチャンピオンシップ、各ステージは1回戦総当たりリーグという方式となり、2004年まで続くことになる。

もっとも、1996年はJリーグがスタートしてまだ4年目。当時の川淵三郎チェアマン（現日本サッカー協会キャプテン）の「走りながら考えよう」の方針の下、柔軟に対応する余地もあった。何より「サッカーの自由性を打ち出していきたいかった」（佐々木常務）という前向きな姿勢だった。

さまざまなアイデア

サッカーという競技は知られていても、プロスポーツとしていかに定着させるかが、発足当時の関係者が心を砕いた点だった。そのため、2ステージ制およびチャンピオンシップという大会方式以外にも、さまざまなアイデアが実行に移された。

その代表的なものが、延長戦で先に得点したチームが勝利するというVゴール方式、そして延長戦を終えても同点の場合に行われるPK方式による勝敗の決着だろう。Jリーグが始まる以前には、サッカーは引き分け試合が多くてつまらない、という声もあった。そこで「決着をつけるほうが応援も盛り上がるし、物事をはっきり決めたいという日本人の心理に訴えるような仕組みにしようじゃないか」（佐々木常務）ということから踏み切った。名称についてはサドンデス（突然死）ではイメージが良くないということから、勝利（VICTORY）につながるゴールということで、Vゴールの名称がつけられた。延長Vゴール方式は画期的な試みだけあって、FIFA（国際サッカー連盟）にも採用について伺いを立てたが、後にはFIFAやUEFA（欧州サッカー連盟）の大会でも実施された。

PK方式は98年まで、延長Vゴール方式は2002年まで続けられた。チーム数も次第に増

えて、選手たちのコンディションについても見直しを図る時期にもきており、90分間の試合で同点の場合は引き分けという、リーグ戦で世界的に一般的なスタイルとなった。

チーム数増加でJ2も誕生

日本全国に地域に根差したクラブをつくり、豊かなスポーツ文化の創造に寄与することも目的としたJリーグは、その理念に共鳴して生まれたクラブを広く受け入れる姿勢を示し、ともに考えながら前進することを目指した。その結果、Jリーグに加盟するクラブは1998年に18を数えるまでになった。翌99年には、10クラブによるJ2が誕生した。

98年といえばスポンサーの撤退などが問題を提起するなど、拡大には不安な時期だったことも事実。しかし「Jリーグの発足以前に比べれば、入場者数などは増えている。クラブを増やすことでファン・サポーターが増えれば普及にもつながり、地域との結びつきも強化される」（佐々木常務）との考えから、1・2部制がスタート。2004年には自動昇降格に加え、活性化をさらに促すために入れ替え戦も導入された。

J1の2ステージおよびチャンピオンシップという方式は、05年から1ステージ、2回戦総当たりのリーグ戦に変わった。日本代表が出場した1998年、2002年のFIFAワールドカップを通し、日本のファンも世界のサッカー事情に精通してきた。年間を通じて積み上げた勝点によってチャンピオンが決まるというスタンダードな方式を受け入れる下地ができていた。

一方、事業的な観点からは、02年のFIFAワールドカップのために大きなスタジアム

が建設され、多くの入場者を見込めるようになった。「試合数が減ったとしても、多くの人々に来場いただければ、事業的にマイナスにはならないのではと想定した」と、佐々木常務は当時を振り返る（実際には05年にはチーム数が16から18に増加）。ファン・サポーターの心理、事業面、競技面など、総合的な判断による大会方式の変更だった。

将来に向けての検討課題

リーグ戦と並行し、リーグカップ戦が「Jリーグヤマザキナビスコカップ」として開催されている。Jリーグ、天皇杯全日本サッカー選手権大会と並び、わが国の3大タイトルとして位置づけられる大会だ。現在はJ1のチームのみで争われているが、1999年から2001年まではJ2のクラブも出場していた。「本来はJ1、J2の全チームが同じ土俵の上で戦うべき大会」（佐々木常務）ということから、チーム数、日程などを検討しつつ、理想の姿を模索していく。

また、大会方式とともにJリーグ発足以来のテーマとなってきたものに、開催シーズンについての論議がある。現在「春に開幕、秋に終了」が定着しているJリーグだが、欧州の多くの国々のように「夏に開幕、年を越して春に終了」というサイクルに合わせてはどうか、というものだ。

欧州のクラブに移籍する選手が増えたこともあり、チームや選手の交流には好都合といえる。しかし、これは降雪など国内の自然条件、社会や学校の活動サイクルなど、競技面の便宜だけでは一概に解決できない課題であり、今後も継続的な検討、慎重な議論が必要となるだろう。

年度別リーグ戦開催概要

Jリーグディビジョン1

年度	大会名（節数）		チーム数	年間総試合数	チーム年間試合数	大会方式
1993	サントリー（18）NICOS（18）		10	180	36	2ステージ制のリーグ戦およびチャンピオンシップ。各ステージ2回戦総当たり（ホーム＆アウェイ）
1994	サントリー（22）NICOS（22）		12	264	44	
1995	サントリー（26）NICOS（26）		14	364	52	2回戦総当たりのリーグ戦（ホーム＆アウェイ）
1996	（30）		16	240	30	
1997	1st（17）	2nd（17）	17	272	32*	2ステージ制のリーグ戦およびチャンピオンシップ。各ステージ1回戦総当たり（両ステージでホーム＆アウェイとなる）
1998	1st（17）	2nd（17）	18	306	34	
1999	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	
2000	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	
2001	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	
2002	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	
2003	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	
2004	1st（15）	2nd（15）	16	240	30	2回戦総当たりのリーグ戦（ホーム＆アウェイ）
2005	（34）		18	306	34	
2006	（34）		18	306	34	

※1999年度より1・2部制（J1・J2）

Jリーグディビジョン2

年度	チーム数	年間総試合数	節数	チーム年間試合数	大会方式
1999	10	180	36	36	4回戦総当たりのリーグ戦（ホーム＆アウェイ）
2000	11	220	44	40*	
2001	12	264	44	44	
2002	12	264	44	44	
2003	12	264	44	44	
2004	12	264	44	44	
2005	12	264	44	44	
2006	13	312	52	48*	

*チーム数が奇数のため、各節1チーム試合なし



両ステージのチャンピオン同士が年間王座をかけて戦うサントリーチャンピオンシップは、2004年が最後となった

「無い袖は振れない」サッカー界

日本経済新聞社編集局運動部部長 ◎ 武智 幸徳（たけち ゆきのり）

PROFILE

1984年、日本経済新聞社に入社。運動部に配属され、以来スポーツ取材を一貫して続ける。アマチュアスポーツから大相撲、ゴルフ、プロ野球などを担当。サッカーは日本リーグ時代から足を運んできた。90年北京アジア大会、92年バルセロナ五輪、FIFAワールドカップは90年イタリア大会から5大会連続で取材。早大卒。



「あれだけお客さんが入って、なぜ赤字になるのか、さっぱり分らん」。プロ野球の球団経営の話になると、Jリーグチェアマンだった川淵三郎さん（現日本サッカー協会キャプテン）がよく首をかしげたものである。

その赤字の理由の一端をあらわにしたのが、横浜ベイスターズ的那須野投手が日大から入団する際の契約金が5億3千万円もしたという事実の発覚ではなかったか。

世間の関心は、那須野投手の一件より、西武ライオンズが目をつけたアマチュア選手の歓心を買うために高校時代から現金を渡していたという事件の方を重く見ているようである。確かにライオンズがやったことはアマ球界のルールを踏みにじるもので、“延焼”の度合いもかなりの広がりを見せそう。ベイスターズの方は契約金の最高標準額（1億5千万円）というプロ球界の申し合わせを（大きくではあるが）踏み越したに過ぎず、同列に論じるべきではないのかもしれない。

ただ、どんな競技であれ、新人という名の戦力補強は必要だ。噴出する不祥事をきっかけにプロもアマも野球界は襟を正すべきではあるが、新卒採用で多少のカネやモノが雇用する側からされる側に流れることはどんな競技でもありそうなこと。ただちにすべてを「悪」とは断罪

できないような気もするのである。

それに比べて5億3千万円は、やはりショックである。5億円といえば、J2の小さなクラブなら1年運営できるような額だろう。それに近い額が、いや、選手によってはそれよりもさらに大きい額が、ルーキーたちに支払われていたのかと思うと本当に驚いてしまう。

昔は高額な契約金は「明日をも知れぬプロの世界はいつクビになるか分からない。サラリーマンが稼ぐ生涯賃金ぐらいい保証してやりたいし、退職金の前払いという意味もある」と言われた。しかし、複数年契約が当たり前になったプロ野球で「明日をも知れぬ」という主張にあまり説得力はなく、大企業ですら簡単につぶれる今日、先が読めないのはサラリーマン社会とて同じ。どんな理屈を並べても常軌を逸した額としかいいようがない。

何となく滑稽なのは、それだけの契約金をもらった選手たちがプロの世界で必ずしも開花はしていないという事実である。スカウトに見る目がないのか、コーチングスタッフに育成能力がないのか、それとも5億円などという額自体がバブルであり実体に即していないだけなのか。それだけ新人の目利きは難しく、どう育つかなんか誰にも分からないのであれば、そんな不確実な部門に巨費を投

じないですむような、つまり、アマチュア球界も望んでいるようなカネのかからないドラフト制度を考えればいいだけだろう。

Jリーグを創る際に、プロで1球も投げしていない新人に大金を払う野球方式についてはさんざん議論した。そんなものに使うカネがあれば下部組織を充実させた方が良くはないかと。その初志は貫くべきだろう。それにJリーグの場合は新人に大枚をはたく前に、今いる選手たちの年俸をナントカしてやる方が先だと私は思う。凡プレーに怒りの拳を振り上げたものの、もらっている年俸を聞いて「額面どおりだな」と、拳を下ろす先を失うことが何度もあるからだ。

そんなサッカーの世界から見たとき、正直なところ、プロ野球をうらやむ気持ちもあるのではない。嫉妬めいた感情というか。これだけのカネを注ぎこめるのはプロ野球に資金力がある証拠で、そのお大尽ぶりに比べたらサッカーは本当に「無い袖は振れない」という言葉がぴったりな感じ。スーパールーキーが現れて、獲得の裏で億単位のカネが飛び交うような醜聞をいっそ聞きたいと思うくらい、サッカー界は地味なのである。だから一度でいいからスタンドからのこんな野次を聞いてみたい気もする。

「5億円返せ、この契約金ドロボー！」



写真提供：© J.LEAGUE PHOTOS



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。